

九州防衛局主催 第19回防衛問題セミナー

日 時：平成23年10月31日（月）18：00～19：40

場 所：宮崎市民文化ホール・イベントホール（宮崎県宮崎市）

テ ー マ：自衛隊の国際協力開始20周年

講 師・演 題：井上 一徳 防衛省運用企画局事態対処課長

「自衛隊の国際協力開始20周年にあたって」

山本 雅治 陸上自衛隊幹部候補生学校教育部長 1等陸佐

「ハイチ派遣国際救援隊1次要員の活動について」

浅岡 哲史 統合幕僚監部運用部運用第2課運用室運営班長 1等海佐

「ソマリア沖・アデン湾における海賊対処について」

（敬称略、講演順）

挨 拶：九州防衛局次長 瀬尾 勝成

司 会：九州防衛局企画部地方調整課長 辻 吉巳

議 事 概 要：

【挨拶 瀬尾次長】 皆さん、こんばんは。本日は九州防衛局が主催いたします防衛問題セミナーによるこそお越しくございました。

私は、主催者を代表しましてごあいさつさせていただきます九州防衛局次長の瀬尾と申します。どうぞよろしく願いいたします。

九州防衛局は日ごろから、防衛省・自衛隊のさまざまな活動を皆様に身近に知っていただくということで広報活動を行っております。その一環として、平成19年度から防衛問題セミナーを九州の各地で開催しており、今回のセミナーで19回目となります。宮崎県におきましては、平成20年6月に新富町で開催しておりますが、ここ宮崎市で行うのは初めてでございます。今日は大勢の皆様にご参加いただきまして、心から感謝申し上げます。

本日のセミナーは、今年が自衛隊の国際協力開始20年目という節目に当たるため、自衛隊の重要な任務の一つである国際協力をテーマに3人の講師からお話をさせていただきました。

最初に、防衛省運用企画局の井上事態対処課長から自衛隊の国際協力の意義、成果など

についてお話しします。次に、地震で壊滅的な被害を受けましたハイチで国際救援隊の第1陣を率いました陸上自衛隊幹部候補生学校の教育部長山本1佐、最後に、ソマリア沖・アデン湾で海上自衛隊P-3Cの航空隊を率いて海賊対処に当たりました統合幕僚監部運用部運用第2課運用室運営班長浅岡1佐が講演をいたします。実際に部隊を率いて過酷な現場で活動された隊長からいろいろな苦労話や体験談をお聞きになることができると思います。

また、最後になりますが、会場の皆様方からご質問等をいただく時間も設けておりますので、ご質問やご意見などをどしどしお願いいたします。

本日はおおむね1時間半という短い時間ではございますが、皆様に有意義な時間を過ごしていただければ幸いです。

本日はどうもありがとうございました。

【司会】 本日の進行を務めます九州防衛局地方調整課長の辻と申します。どうぞよろしくお願いたします。

それでは、早速ですが、最初に「自衛隊国際協力開始20周年に当たって」と題しまして、防衛省運用企画局事態対処課長の井上一徳からお話をさせていただきます。

井上課長は、昭和61年に当時の防衛庁に入庁いたしまして、平成17年に防衛局防衛政策課事態対処法制室長、平成19年に内閣官房内閣参事官、平成22年7月に現職の防衛省運用企画局事態対処課長に就任されました。

それでは、井上課長、よろしくお願いたします。

【井上課長】 紹介いただきました防衛省事態対処課長の井上と申します。

今日は、平日にもかかわらず、多くの方々に集まっていただき、こうやってお話をさせていただく機会をいただきまして、ほんとうにありがとうございます。また、常日ごろ、防衛省、自衛隊に対して格段のご支援をいただきまして、改めて感謝申し上げます。

先ほど紹介がありましたように、後ほど、山本1佐からハイチ、浅岡1佐からソマリアの実体験を踏まえた具体的な話があると思いますので、私からは「自衛隊の国際協力開始20周年に当たって」ということで、自衛隊としてどういう活動をやってきたか、それからどういう課題があるかを15分程度でお話させていただきたいと思っております。

まず、国際協力の意義でございます。皆さんもご承知のように、日本は資源のない国で

す。資源のない国がこうやって工業国として国際社会の中でG N P世界第3位の繁栄を築いているわけですが、こういった繁栄を築くには国際社会が平和で安定していることが大前提になるのは皆様もよくご承知のとおりです。そういった国際社会の平和と安全に自衛隊としても積極的に貢献していこうというのが国際協力の意義です。

皆様がここにお入りになるときにお渡ししたパーフェクトガイドをお手元に持っておられると思いますけれども、基本的にはこれの概要を説明させていただきたいと思います。

まず、海外での活動の変遷です。最初に実施したのが、ペルシャ湾への掃海部隊の派遣であります。掃海部隊を派遣したのが1991年でしたので、ちょうど20年になるということで、この20周年の話をさせていただいているわけでございます。

ペルシャ湾で実際に何をやったか。イラクによるクウェートへの侵攻に端を発した湾岸危機において機雷がたくさんペルシャ湾にまかれました。我が国のタンカーがペルシャ湾を通ること、また、国際社会としても機雷を除去しないといけないという観点から、我が国としても機雷の除去に参画するという決定をいたしました。海上自衛隊から掃海艇——機雷を無力化する機能を持っていて、金属だと機雷が反応するというので全部木製の小さな船——をペルシャ湾まで持って行って、全部で34個の機雷の除去をしました。そうした非常に高い技術によって国際社会からも高く評価されました。

ペルシャ湾が終わった後、次がカンボジアであります。カンボジアは20年ぐらい内戦、内乱がありました。そこで、国際連合としてカンボジアの国づくりに協力していこうということで、全世界から約2万名が参加して国際平和維持活動が行われることになりまして、我が国もPKO法をつくり、自衛隊が参画できる枠組みをつくりました。その枠組みに基づく最初の派遣として、カンボジアに自衛隊の施設部隊と停戦監視要員を出しました。道路や橋の補修をいたしまして、非常に丁寧な仕事ぶりということで国際社会から評価されました。

こうやって、ペルシャ湾への掃海艇の派遣、カンボジア国際平和協力業務を皮切りに、大変見にくいですが、パンフレットで見ただけだと思いますが、今までにアジア、中東、アフリカ、中米で約30の海外での活動を実施し、延べ約4万人の自衛隊員を派遣しております。

私は、ルワンダへの人道的な支援に参画しました。ルワンダはアフリカの真ん中にあります。大量殺りくなどがあって非常に国が混乱したということで、その後の国づくりのために自衛隊の部隊も出たわけです。こういった部隊の活動に参画したことがございます。

こういうことで大体30の活動をやってきましたが、現在も続いておりますのは中東のゴラン高原での活動、後ほど山本1佐から説明がありますハイチでの活動、それからインドネシアの近くにございます東ティモールでの活動、また、後ほど浅岡1佐から詳しく説明がございますソマリア沖での海賊対処などございます。

私からごく簡単に概要を説明いたしますと、ゴラン高原についてはシリアとイスラエルの間で緊張状態が続きまして、そこで停戦合意がありました。イスラエルとシリアの間で紛争がないようにということで停戦監視の部隊がありますけれども、そこに司令部要員と輸送部隊を派遣しております。今まで32次の司令部要員を出しました。これは、我が国のPKOの最長記録となっているものであります。

続いてソマリア沖・アデン湾です。ここについては後ほど詳しく説明があると思いますが、これは日本の飛鳥という客船ですが、アデン湾を通るときに海上自衛隊の護衛艦で護衛しています。ここでは日本の船を出しておりますけれども、日本の船も外国の船も分け隔てなく護衛活動をやっております、今まで海上自衛隊が護衛した船で海賊行為に遭ったものはないということで、これも仕事ぶりが高く評価されています。

国連ハイチ安定化ミッションについては、ハイチで大きな地震があったため、ほかの国と一緒に施設部隊が国づくりに協力しています。これは山本1佐からまた詳しく説明があると思います。

東ティモールについても同じく停戦監視の要員として出していますが、ここについては、写真で示しますとおり、女性の隊員も活躍しています。これは、個人派遣としては初めて女性自衛官も参画した事例でございます。

では、これからの自衛隊の国際協力に係る課題ということで幾つか紹介させていただきます。

先ほど申し上げましたとおり、20年間、海外での活動を積み重ねてまいりますと、自衛隊に求められる役割も増加、多様化しています。先ほど申し上げましたように、自衛隊の仕事ぶりは非常に丁寧に日本らしくやっておりますので、国際社会からの自衛隊に対する期待は非常に高い状況であります。また、20年間活動をしてきた中で、国連のPKOも大きく変遷してきました。今までは伝統的PKOということで、紛争があった後、そういった紛争が起こらないための停戦監視等の軍事的役割が主立ったものでありましたが、今は、複合型PKOと言っていますが、停戦監視のみならず、ハイチや東ティモールの例がありましたが、国づくりのための包括的な役割を担うということで、軍事部門のみなら

ず、自衛隊以外の政府全体の文民部門との連携の重要性が増大しています。

こういったことで、20年たつということ、PKOのあり方に関する懇談会が関係省庁の副大臣級で開かれました。その中でいろいろ議論を重ねて中間取りまとめが発表されましたけれども、そこから課題として幾つか抜粋したものが以下の五つです。

先ほど申しましたように、防衛省・自衛隊のみならず、政府、関係機関やNGO等を含めたオールジャパンとして一体的に取り組む姿勢が必要である。

それから、警察官、海上保安官を含む文民派遣について、これまで丁寧な仕事ぶりが評価されていますので、そういった実績や得意分野を考慮し、日本らしさを生かした派遣のあり方、そういった日本らしさを生かした派遣のあり方を検討する。

それから、PKO参加5原則、業務の内容、実施に必要な武器使用のあり方等についても検討しておく必要があるだろう。

それから、各種制度、人材をどう育成していくか、教育訓練をどうするかなどについても検討しておくことが必要だろう。

それから、広報に一層努めるということで、派遣終了後に意義、成果を評価し、公表する。今回、こういうお話の機会をいただいておりますけれども、国民の皆様、国際協力について理解を促進していただくため、我々としても積極的な広報に努めていくという姿勢で臨みたいと思っております。

先ほど申し上げましたとおり、国際社会が安定していないと我が国の繁栄がそもそも成り立たないという考えのもと、グローバルな安全保障環境の改善、それから世界の平和と安定のために、より一層積極的な国際社会における役割を果たしていくということで、今後ともこういった活動については積極的に参加していきたいと思っております。

私からの概括的な説明は以上で終わります。次は、山本1佐、浅岡1佐のほうから具体的にどういう活動をしているかについてご説明をいたします。

どうもありがとうございました。(拍手)

【司会】 どうもありがとうございました。

それでは、続きまして「ハイチ派遣国際救援隊の概要について」ということで陸上自衛隊幹部候補生学校教育部長山本雅治1等陸佐からお話をさせていただきます。

山本1佐は、昭和58年に防衛大学校を卒業、平成17年に第8師団司令部第3部長、平成20年に中央即応連隊長、平成22年2月にハイチ派遣国際救援隊長、そして平成2

2年8月に現職であります幹部候補生学校教育部長に就任いたしました。

それでは、山本1佐、よろしく願いいたします。

【山本1佐】 皆さん、こんばんは。陸上自衛隊の幹部候補生学校教育部長をやっております山本です。先ほど井上課長のほうから紹介がありましたとおり、ハイチ派遣1次隊の隊長として行かせていただきました。

まず、こういった場で話をさせていただくことに感謝を申し上げます。といたしますのも、なかなかこういう機会がありません。我々自衛隊の中においても、なかなか説明しづらいところがありまして、こういった説明をさせてもらえる機会があるということは我々にとっても非常にありがたいことだと思っています。

我々は1次要員でありました。ちょうど1年9カ月前です。現在はハイチに5次隊が行って頑張っています。その5次隊は、まさに九州の西部方面隊を基幹とする部隊です。

最初に行ったときの状況をぜひ皆さんにご理解いただきたいということで話をさせていただきます。

これについては先ほど課長が言われましたとおりです。

ハイチの場所は、見ていただいたらわかるように、アメリカのフロリダ半島がありまして、そこから先に少し行ったところになります。アメリカの裏庭と呼ばれているところです。

本日話します内容については5項目です。最後については、全部終わって、そろっての話になります。1、本作戦の特性、2、活動状況、3、CRRの部隊配置、このCRRというのは、私は前職は中央即応連隊長をやっていましたけれども、Central Readiness Regimentの略であります。次に、4、教訓・成果ということで話をさせていただきます。

まず、特性です。先ほど地図で言いましたとおり、フロリダ半島がここにあって、ハイチはここ、これはキューバです。我々は2月6日に日本の市ヶ谷で編成完結して、まず政府専用機でマイアミに行きました。マイアミから今度は航空自衛隊のC-130でもってハイチの首都ポルトープランスに入りました。2月6日に羽田を飛んで、次の日の7日にはポルトープランスに進入しました。

右上の赤で囲った図がハイチを拡大したものですけれども、ピンクの部分に書いてありますとおり、地震で起こった災害でしたので、我々の前に国際緊急医療援助隊という部隊——中国地方にあります広島県の海田市の部隊を基幹とする部隊が1月22日から入って

おりました。その約2週間後に我々がまた新たに入っていったと。

ただ、違いますのは、我々は国連の指図下で国連平和維持活動（PKO）部隊として行きました。国際緊急医療援助隊は外務省の所掌になりますので枠組みが変わります。何が違うかという、国際緊急医療援助隊は一応自衛隊ですけれども、武器を持っていませんで、丸腰です。我々はPKO部隊ですので、武器を持っていっています。個人装備火器や部隊装備火器、例えば機関銃などを持っていきました。

さらに、場所が違います。国際緊急医療援助隊はレオガン、これは首都のポルトープランスから西に約40キロメートル離れているところです。安全な場所であるということで、とりあえず1月下旬に行ったということです。我々は首都のポルトープランスへ行きました。

ハイチという国は北海道の3分の1ぐらいの広さです。そこに約1,000万人が住んでいます。ポルトープランスにいる人たちは約200万人です。その中の約1割である20万強の人が亡くなられたという状況です。先般の東日本大震災で亡くなられた方々は約2万人ですので、その10倍の方々が当時の震災で亡くなられました。

ハイチという国を説明しますと、実はここは皆さんがよく知っている島です。ヒスパニオラ島という島です。1492年にコロンブスがアメリカ大陸を発見したという最初の島が実はヒスパニオラ島であったと言われていました。そのヒスパニオラ島の西半分がハイチ、これは旧フランス領です。右半分は旧スペイン領ドミニカです。

先ほど言いましたとおり、我々はマイアミからC-130という輸送機を使って入りましたけれども、当時、国連のMINUSTAHと呼ばれるハイチ安定化ミッションも被災し、また、ポルトープランスの空港自体も被災して機能していませんでしたので、一般の民航機が入れませんでした。したがって、各国がいろいろ行きましたけれども、軍用機のみが現地に入れたという状況でした。我々は、たまたま航空自衛隊のC-130がアメリカで訓練をやっていたので、その1機をお借りして、逐次、その1機で入っていったという状況です。細部については、また後ほど説明をします。

遭遇戦と書いてありますが、「そうぐうせん」と読みます。これは我々陸上自衛隊の業界用語です。何かといいますと、基本的に状況がわからない状態です。攻撃や防御をするときには、当然自分のことも知らなければいけません、相手のことをまず知らなければいけません。ところが相手のことがわからない。なぜかという、地震という自然災害で起こったものであるからです。したがって、ここに書いてある三つのような状況でした。

一つには、国際緊急医療援助隊から引き継いだPKOは初めてで、過去にあったPKOで地震が起こって現地に行ったというPKOはありませんでした。状況が何もわかりませんでした。

二つ目には、上記の状況であったため、宿営予定地域の決定——我々はどこに行くかがわかったのは日本を出国する3日前でした。当初はずっと、先ほど説明したレオガンに行って復興支援活動をやるということでしたけれども、実はポルトープランスになったよと決定したのが出国3日前でした。こんなことは普通ありません。これまでもそうですけれども、大体行くところが決まっていて、宿営地も決まっていて、どんなことをするかも大体決まっているというのが普通ですが、先ほど言ったとおり、地震という突発災害であるところから、そういうふうになりました。

三つ目、国連のMINUSTAHも被災しています。我々はPKO部隊ですので、国連の指揮下に入らなければいけません。ところが、その国連も被災して、国連の職員が100名以上亡くなっています。国連のトップである文民の特別代表と言われる方も亡くなって、急遽グアテマラから来られた方が特別代表として現地で活動をしていました。

このグラフは、現地に入っていった人員の推移を示すものです。ピンクで示してあるところが我々1次隊で、2月6日、7日以降、逐次こうやって入っていきました。青い部分については、我々の後に来た2次隊である北海道の部隊が入ってきた状況を示しています。見ていただいたらわかるように、1日ずつ逐次人が入っていきました。実は、私が連れていった隊員は203名おりますが、実際に203名全員がそろうのに約1週間かかっています。先ほど話したC-130という輸送機は、大体40～50名が乗ったら、あとは荷物を乗せれば乗れません。ですので、大体40名ずつが逐次1週間かけて現地に入ってきました。

2次隊が2月中旬ぐらいから逐次入ってきましたので、我々は1カ月半現地で活動しましたけれども、最終的にはその間に2次隊の約350名が現地に入ってきたという状況になります。

それでは、活動状況について説明をします。

一番上の写真が、我々が現地に到着した2月7日の状況です。何もありません。宿営できるように、ブラジル軍がトウモロコシ畑をきれいに整地してくれていた、そういう状況であります。赤枠で示してあるところは、当日、我々が行って、レオガンにいる国際緊急医療援助隊から天幕を借りて設置した状況です。ここにある道路沿いに建てました。こう

いった状況で1次隊の中の先ほど言った最初の40名が入っていききました。

次の写真が、約1週間していろいろな荷物が届いたという状況です。最終的には、こういった形で2次隊以降を受け入れられる宿営地をつくりました。逐次、いろいろ荷物が入ってくるにつれて、いろいろ場所を変えながらつくっていききました。これはドラッシュ天幕といいます。国際専用装備品で、私が前にいた中央即応連隊しか持っていません。これを約80張り建てました。

現地の気温は約40度、湿度が70～80%です。乾季であっても湿度が高いです。雨季は5月以降になります。我々が行ったときは2月初旬でしたので、まだ乾季でした。かつ、現地は蚊が多く、マラリアが非常に多いです。40度の中、シャワーもふろも当然ありません。食べ物は当然レトルトだけです。そういった中、隊員は非常に頑張ってくれました。かなり汗だくだくで、ふろも入らず、シャワーも浴びず、基本的に汗をかくと臭いですけれども、1週間ふろに入らないと、臭いのがにおわなくなってきました。周りがみんな臭いから、同じ天幕の中に入っているだけでも全く問題ありませんでした(笑)。

私は下着を2週間分何とか足りるようにと持っていききましたけれども、実際に使ったのは2着だけでした。最初の1週間は1着を逐次裏返しながらいっていたところ、においも気にならなくて全然問題ありませんでした。ただ、NHKのカメラマンの方に「ちょっとにおいますね」と言われたときに、やっぱり臭うんだなと思いましたが、全然気になりませんでした。

先般の東日本大震災で我々自衛隊が行って支援したときも同じような状況でした。なぜそれができるかということ、日ごろからそういう訓練をやっているからです。演習に行けば、基本的にふろはありませんし、飯を炊くことなく、レトルトを食べていますので、そういうことに耐えられるということです。ただ、演習であれば、例えば1週間だったら1週間後には終わりますが、こういった実オペレーションは後ろがわかりません。そこがかなりきついです。ただ、それを訓練の中で克服していくのが大事なことだろうと思っています。

これは、宿営地の天幕をいろいろかえ、最終的には10回ぐらい引っ越ししながら、先ほどの最後の写真の3月の姿にしていきました。最初の1週間は届く資材が非常に少ないので、我々は地べたに寝転んで寝ていました。演習場でころんと寝転んで寝る感じです。

ですが、ありがたいことに夜は日本の夏よりも涼しいです。日中は40度まで行きますが、夜になると20度ぐらいに下がって、非常に過ごしやすいです。ただ、気温差があるので、体がなれていないがゆえに、暑い中、風邪を引く者が結構おりました。わざわざ暑

いところに行って何で風邪を引くんだと思いますが、そういうところに行くと、環境の変化になかなか体がついていきません。そういったところに行ったときは、まず体をならすことが大事だろうと思います。私の後に説明する浅岡1佐が行ったジブチは気温50度です。40度は大したことはありません。

次は支援実績です。基本的に我々は四つの仕事をやりました。まず何をしなければならぬかに行く前から私が考えていたのは、日本の代表として行くので、まず日本の国旗を立てる必要がある。そして、復興支援ですので、当然、復興支援の活動をしなければいけない。最後に、当然のことながら、私が連れていった203名を一人残らず無事に連れて帰らないといけぬ。この大きな三つの役割・任務を考えておりました。

先ほど言いましたとおり、被災した国連のMINUSTAHと調整をしながら、最初に来た仕事がポルトープランスの国際空港の整備作業です。これが2月16日ですので、2月7日に現地に入って、約10日後にやっと仕事できたということです。これは、受け入れ部隊の宿営地をつくり、あわせて復興支援活動もやるという、いわゆる二正面作戦でしたので、かなり隊員はきつかったと思います。

おまけに、我々はあくまで人だけが1週間かけて先に入っているわけです。我々の後ろについてくる兵たん物資はすぐには届きません。先ほど言ったとおり、軍用機しか現地には入れませんでしたので、有名な世界で最大の輸送機であるロシアのアントノフを何機も借りて、その中に重機を積んで、現地のポルトープランスにおろしました。ただ、我々のときは、空港も被災し、空港の機能が一部使えませんでしたので、隣国のドミニカにおろして、ドミニカから大型トレーラーに積んでハイチに持っていきました。ドミニカから陸路を来るには約1日かかります。おろして、1日かけてまた取りにいったということでやっていましたので、復興支援活動をやるための重機がなかなか届きませんでした。

それがやっと届いて、この仕事ことができましたというのが次の写真です。ちょっとした狭い場所に砂利を敷いて、ならして、その上に新たな国連の施設を建てるという非常に簡単な仕事でしたので、半日ぐらいで終わりました。非常に丁寧な仕事をやってくれたと国連の人がびっくりしていました。これは施設部隊の特色であります。大体こうやって砂利を敷いて、バケットローダーという機材を使ってならしますけれども、その後もきちんと手作業で修正します。作業が終わった次の日には新たな施設がどんとこの上に建っていたという状況です。

次が二つ目、ナデル美術館整備施設作業です。我々1次隊にとっては一番長くかかっ

た仕事です。ナデール美術館というハイチでは非常に有名な美術館です。ナデールというのは人の名前です。いろいろな国宝級の彫刻や絵画などが全部崩れてこの中に埋まっていました。実際、何千点と埋まっていました。小高い丘の上にありますので、油圧ショベルを非常に狭い道を毎日持っていき、この油圧ショベル1台で瓦れきをのけながらやっていきました。このときは、いろいろな国がかかわっています。瓦れきを運んでもらったのはブラジル軍のダンプです。我々と一緒に掘り出していた人たちはイタリアのレスキューチームです。我々自体のこういった活動の大きく全般的な警備をやってくれていたのがネパール軍です。いろいろな国が絡んでこの仕事をやっています。後ほどビデオを見ていただきますけれども、その中でも出てくると思います。

この方がナデールさんという方です。非常に怪しい人です(笑)。ハイチの国民は、基本的にアフリカの方です。アフリカよりもアフリカらしいと言われている国です。したがって、基本的に顔の色は真っ黒です。この方はレバノンの方で、おじいさんがナデール美術館をお建てになりましたが、この方が仕切ってやっています。調整をしている段階から、早く掘れ、早く出してくれということでやっていましたが、1週間ぐらいたら大きな金庫が四つぐらい出てきて、何が入っているのか、お金か何かわかりませんが、それを掘り上げたら、次の日からこの人は来なくなりました(笑)。美術品ではなく、その金庫が目当てだったのだと思います。次の日から1週間いなくなって、1週間後に出てきたので、「どこに行っていたんだ」と言ったら、「フロリダのマイアミに遊びにいった」と。とんでもないやつだなと思いましたが。

1カ月かかって何千点というものを掘り出しまして、最終的にはナデールさんから国連を通じて感謝状をもらっています。陸上自衛隊がナデール美術館にあった美術品を掘り起こしてくれたと。とりあえず感謝していたのだなとは思いました。それはよかったんですが、現地ではとんでもないやつだと思っていました。現地の方は、ほんとうにそこら辺に寝転がっていて、住む家も食べる物も水もない状態なのに、片手に缶ビール持って、片手でたばこを吸いながら調整するわけです。ほんとうに許せない日本人として思いましたが、感謝状をもらったということで、とりあえず許してやるかとは思っています(笑)。

三つ目が宿营地造成・整備施設作業です。先ほど最初に言いましたけれども、我々が宿営したところはブラジル軍が整地してくれました。それと同じように、今度は我々が、我々の後に来る国のために、トウモロコシ畑がこういった形になっていましたけれども、1機しかないブルドーザーで整地しました。ペルーやインド、ナイジェリア、パキスタンなど

の部隊が我々の宿営地の隣に入るといふことでつくらせていただきました。

四つ目、建物診断です。これが最後の仕事になります。私が連れていった中には1級建築士が4名いて、彼らがひびが入ったりいろいろしている建物を見て、崩したほうがいいのか、または補修して使えるのか診断しました。非常に丁寧な仕事をしました。ここに書いておるとおり、私たちは3月下旬にみんな帰ってきましたが、彼らは取り残されて、4月下旬まで1カ月延ばして仕事をしてもらったといふことで、国連の中で非常に評判がよかったです。日本隊しか建物診断の機能を持っていませんでした。

ビデオを見ていただきます。5分ぐらいです。

(DVD上映)

【山本1佐】 画像を見ていただいたらわかったと思いますけれども、大体ああいう形でやってきました。今は、1次隊がやっていたものがらりと変わって、完全にコンテナ化しています。お風呂もあります。炊事も日本食ができるようになっています。別世界になっています。ある意味、パラダイスみたいなものです(笑)。

写真のこの方はブラジル軍の我々でいうところの航空幕僚長、空軍のトップの方です。サイトウ大将といひます。ここに書いてありますとおおり、ブラジル大統領が現地の軍隊を視察に来られるといふことで、急遽、陸・海・空の3軍の司令官も来られていました。サイトウ大将は日系2世です。ぜひ日本から来ているコマンダーに会いたいといふことで呼ばれて行きまして、話をしました。日本語べらべらです。この方は日本人です。お父さんは青森県、お母さんは香川県、本人は熊本県と言っていましたけれども、よくわかりません。(笑) 聞くところによると、ブラジルで11歳までは日本語で育てられたと。それ以降、こうやって自分なりに頑張って空軍のトップまで上がっているんだといふことでした。

ブラジルは当然のことながら親日国ですので、日系の方がほんとうにいろいろな世界で頑張っておられます。政府の高官にも日系の方がおられるし、サンパウロは日本人が非常にたくさんおられるところですよ。私もびっくりしましたが、まさかハイチに来て、日本語で他国の方と話ができるなんて思ってもいませんでした。日本という国または日本人がいかにすばらしいかをつくづく身にしみて感じることができ、ほんとうに感謝しました。

これは、我々の業界用語でいうところの部隊配置を展開したものです。

私は前職は中央即応連隊長をやっていましたけれども、うちの連隊の隊員は700名います。その中で、ここに書いてあるとおおり、私以下約200名がハイチに行っていました。先に出しました国際緊急医療援助隊にも1個小隊を出していました。丸腰ですけれども、

警備上の問題でつけて出していました。それから、この後、浅岡1佐が説明しますけれども、アフリカのジブチにもうちの連隊は約50名の隊員を中隊長以下出していました。ちょうど2次隊と3次隊——それこそ浅岡1佐は2次隊ですけれども、浅岡さんの下に約50名の隊員を配属して、統合任務部隊として行っていましたので、たまたまその交代時期は100名の人間がここに行っていました。タイのコブラゴールドという一般訓練を毎年やっていて、そこにも1個小隊30名を出していました。したがって、トータル700名のうちの350名、うちの連隊の半分の隊員が世界に散らばっていたという状況です。日本に残っていたのは、副連隊長以下1個中隊しかいませんでした。

ですので、私は、ハイチから帰ってきたときに、まず副連隊長に異常はないかということを知りました。どこかでけがをしたり、または下手をしたら死んでいる隊員がいるかもしれないと思いましたが、副連隊長から「異常ありません」と聞きまして、ほんとうに安心しましたけれども、ある意味、連隊長がいなくても全然問題はないんだと、がくっとなりました。(笑)しかし、ほんとうに隊員には感謝しました。それぞれが自分の任務・役割をしっかりと認識して、それぞれの場所で頑張ってくれたのだなと思っています。

最後になりますが、教訓・成果です。四つです。

戦力設計どおりの派遣です。中央即応集団という我々の親部隊が平成19年に立ち上がりました。中央即応連隊という私が前にいた部隊は平成20年、3年前に立ち上がった部隊です。それは、こういった現在の国際環境、国際平和協力活動が増えてきた情勢の中で、そういう部隊をつくらないといけないということで作り上げたもので、その戦力設計どおりの仕事をしたこととなります。したがって、我々にとってみれば、ある意味、訓練どおりにやったんだと、その場所がたまたまハイチであったというだけであります。

それから二つ目、国際社会の一員としてのプレゼンスの発揮です。これは当然のことですけれども、ただ、私が行ってびっくりしたのは、現地でほんとうに歓迎をされたことです。先ほどのブラジルのフォース・コマンドーが言われたのが、太平洋を渡ってよく来てくれたと。地震が起こって、太平洋を渡って工兵部隊として行った部隊は日本が初めてでした。2週間後に、たまたま同じように太平洋を渡ってきた国がありました。歓迎ぶりが全然違いました。コマンドー・ミーティングといって、MINUSTAHには47カ国が参加していますので、47人の各国代表のコマンドーが集まります。私は、その中で大喝采を受け、よく来てくれたと大歓迎されましたが、2週間後に来た部隊には、よく来てくれたとは言いますが、全く歓迎ぶりが違います。そういった意味では、早く来てよかつ

た、日本の国に生まれてよかったと（笑）。私しかいい思いをしていませんけれども、ほんとうにうれしかったです。

それから、現地環境に応じた活動です。先ほど言いましたとおり、非常に暑い中、また伝染病やマラリアなどいろいろある中でやらなければいけません。ましてや、いつ終わるかわからないということでしたので、まず現地の環境に慣れろ、しゃかりきになって仕事をしようとするなど、特性を把握してやりなさいと。したがって、朝は早く起きて涼しいうちに仕事をし、暑いときは休ませました。そして、夕方まで仕事をさせるという形で、日課時限を変更して、現地に応じてやりました。

また、現地は、画像には映りませんでしたけれども、車が多いです。びっくりします。ハイチは西半球の最貧国と言われてはいますが、何でこんなに車が多いのだろうと思うぐらい車が多いです。交通ルールはありません。一応信号機はあります。信号は守ります。ところが、センターラインも歩道也没有ありません。あいているところは川だろうが何だろうがどこでも走っていいわけです。あるとき、びっくりしたのは、ここは一方通行かと間違ってくるくらい、向こうから来る車が全部こちらを向いているわけです。どうなっているんだと。ところが、ずっと動き出すと全然ぶつかりません（笑）。走っている車はほとんど日本車です。ところが、ライトもバンパーもドアもついていません。日本では絶対に車検に通らない車ですが、多分日本の技術がそうさせているのだと思います。ちょっと故障を直せば動くんです。向こうの人にしてみれば、動くだけでいいわけです。別にナビなんてものは要らないわけで、とにかくタイヤが回ればいいんだと。日本車ばかりでびっくりします。トヨタ、日産、マツダ。私は広島県出身なので、マツダまであるのかとびっくりしました。向こうの人は日本のことをよく知っています。

ハイチの人はクラクションを鳴らしながらがんがん行くので、我々は最初は戸惑いましたが、最後は自衛隊の車もドライバーが現地の人たちよりもクラクションを鳴らしながら走っていました。現地環境に応じた活動が大事であると。

最後は、制約ある教育訓練の重要性です。今言ったとおりです。訓練でやったことしかできません。東日本大震災で自衛隊が感謝されましたが、我々は感謝される必要はないわけです。なぜなら、いつもやっていることをやっているからです。決して防災訓練ばかりをやっているわけではなく、当然、自治体と連携しながら防災訓練をやっていますけれども、それはごく一部の仕事でしかないわけです。我々はあくまでも国を守る、国民の生命・財産を守るために訓練をやっています。非常に厳しい環境の中でその訓練をやっています。

先ほど言いました中央即応連隊は、必ず国際任務において先遣隊で行くという任務を与えられています。何もわからないところに行くんだと。国内ではない、国外だよと。海を渡っていく。下手したら、生きて帰れないかもしれない。そういった環境の中で訓練をやらせました。ひっきりなしに何も無いところに行って、まず宿営地をつくり、後続の部隊を受け入れる態勢をつくるということで、そういった厳しい環境の中でやらせましたので、私は一日でも早く帰りたかったのですけれども、隊員は「まだ大丈夫です」と言っていました。「おまえは残っておけ」と言いましたけれども（笑）。でも、そういった言葉が隊員から出たのは、私は指揮官として非常にうれしかったです。

今回の東日本大震災でも、大災害でしたけれども、基本的に自衛隊はいつもやっている訓練と変わらないことをやっています。決して悲惨な環境の中ではやっていません。演習で寝転がって、レトルトを食べて、飯が食えるだけでもありがたいという訓練をやっていますので、それは当たり前のことであると思っています。そういった訓練を陸・海・空自すべての部隊がやっていることをご理解ください。逆に言うと、決して大したことをやってきたわけではありません。

ただ、現地では日本隊は非常に評価が高いです。工兵部隊として行っているのは、日本、韓国、ブラジル、チリ、エクアドルです。4個単位しか持っていませんが、現地が一番仕事をしているのは日本隊と言われてます。次が韓国です。こういった順位をつけると語弊がありますが、そういった評価を受けて、現地ではほんとうに主体的に頑張っています。

ハイチがどんどん復興して、今頑張っている5次隊が一人残らず無事に帰ってくることを祈念しながら話を終わらせていただきたいと思います。後ほど質問時間もあるそうですので、そのときに質問していただけたらと思います。

以上で終わります。（拍手）

【司会】 どうもありがとうございました。

それでは、引き続きソマリア沖・アデン湾における海賊対処につきまして、統合幕僚監部運用部運用第2課運用室運営班長の浅岡哲史1等海佐からお話をさせていただきます。

浅岡1佐は、防衛大学校を昭和61年に卒業し、平成17年に航空集団司令部幕僚、平成20年に海上幕僚監部教育課教範教材班長、平成21年に第5航空隊副長ということで、このときに平成21年10月から平成22年2月までの4カ月間、ソマリア沖・アデン湾

に第2次派遣海賊対処行動航空隊司令を務めております。そして、平成22年8月に現職であります統合幕僚監部運用部運用第2課運用室運営班長に就任いたしました。

それでは、浅岡1佐、よろしくお願いいたします。

【浅岡1佐】　こんばんは。お話が続いてきつところかもしれませんが、もう少しおつき合いいただければと思います。統合幕僚監部からまいりました浅岡1佐です。

今日の題目は「ソマリア沖・アデン湾における海賊対処について」です。私は、先ほどご紹介いただいたとおり、2次隊として平成21年10月5日から約4カ月間現地に行っておりました。そのときの経験をもとにお話をさせていただきたいと思います。

スクリーンについては、今大体ご紹介いただいたとおりですが、私の言いたいところは、家族、妻（宮崎県）だということです（笑）。非常に縁の深い宮崎県にまいりまして、日ごろいろいろとご支援いただいている皆様にアフリカのお話ができることを非常に光栄に思っております。頑張っていきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

経歴としては、今ありましたとおり、沖縄県的那覇の第5航空隊にいたときに、どうせ暑いところにいるなら、もっと暑いところに行ってこいということで、アフリカにも少し行ってきました。なかなか合理的な人事をするのが海上自衛隊であります（笑）。

今日お話をさせていただく内容は3点です。アデン湾あたりの情勢がどうなのか、そして海賊対処に行く枠組みなどはどうなっているのか、そして3番目に、実際に行ってみてどんな感じなのかというところをお話させていただきます。

では、周辺の情勢ということでお話をさせていただきます。

まず、ソマリア沖・アデン湾はどこなのだろうということになるかと思いますが、実は私は、行けと言われるまであまりよくわかりませんでした。スクリーンの黄色い網かけをしているところであります。日本から約1万2,000キロメートル、地球の4分の1周ぐらい離れているところあります。アラビア半島とアフリカの東側、Horn of Africa（アフリカの角）と言われるところですが、そこに挟まれている黄色い網かけの海域がアデン湾であります。日本からアデン湾を通過して、そしてスエズ運河を通過してヨーロッパに行く航路の重要な部分を占めています。

地図で見るとソマリア沖・アデン湾は非常に小さいですけれども、実は非常に大きなところでありまして、本州がすっぽりと入ってしまうぐらいの大きさであります。

アデン湾を通る船は約1万8,000隻いて、その中の日本に関する船舶は約1割強の

2,000隻です。その2,000隻が海賊の脅威にさらされています。

では、海賊、海賊と言うけれども、どれぐらい起こっているかという話になろうかと思えます。スクリーンでは海賊事案の発生事件数を見ていただいております。横軸については西暦、縦軸については海賊事案の起こった件数であります。紫色は一時期海賊が多いということで問題になっておりました東南アジアで、赤がソマリア沖・アデン湾で起こっている海賊事案の数であります。一べつしておわかりいただけたと思いますけれども、東南アジアの海賊事案数は、最後の年は少し増えています、基本的には減少傾向にあります。ただ、ソマリア沖・アデン湾については急激に増えていっています。特に2006年から2009年にかけては、毎年大体2倍以上のペースで増えていっています。2010年については高どまり状態です。ちなみに2011年につきましては、新しいデータはありませんけれども、8月末のデータでは2010年の同時期の1.6倍ということで、また増え始めています。

なぜ海賊事案が起こるのかという話になろうかと思えますけれども、貧困問題や周りの国に取り締まる能力がないということが考えられます。特にソマリアは中央政府がない状況でありまして、だれも取り締まりません。したがって、海賊がどんどん増えていっています。

よくニュースで船が捕まったと言っているけれども、では、どれぐらいの船が捕まっているのかというご質問があろうかと思えますが、次が被拘束船の隻数の推移であります。2009年から2011年までの3年間ですけれども、2010年の夏ぐらいまで低いところで停滞していますが、2010年の後半から劇的に伸びている状況です。ただ、2011年の夏以降はやや下がりつつありますけれども、過去と比べると、ものすごく高い数であるのがおわかりいただけたと思います。

後でこのあたりをまた詳しくお話をしますけれども、この表では夏の時期及び冬の時期を緑の網かけでしていますが、この時期はモンスーンといって強い風が吹いて海が荒れます。したがって、2010年の前半ぐらいまでを見ていただければ、緑のところになると捕まった船が減っているのがおわかりいただけたと思います。海が荒れているので、出ていけないということです。それが2010年の中旬からはそんなに減らなくなっていっています。なぜだろうかというのは後半でお話をしていきたいと思えます。

海賊船、海賊船と言いますけれども、今はやりの海賊映画のような船で来るのかという話ですが、そういうことはありません。例えば、現地をP-3C哨戒機で飛んでいて、ス

クリーンのような船を見つけました。さあ、どうでしょう。この船はSKIFFと呼ばれる船で、現地では専ら漁業に従事している船であります。しかしながら、このような状況の船を飛行機で見たときには、極めて海賊の可能性が高いと判断いたします。

その理由は、船の舷側にはしごをかけて乗り込むのが海賊の手口でして、漁業に全く必要のないしごを持っているからです。次に、よく見るとおわかりいただけると思いますけれども、船外機が二つあります。漁業でそんなに高速を出す必要はありません。それなのに、なぜ二つあるのかと。やはり船を追いかけて乗り込む必要があるからです。また、漁業をするにもかかわらず、漁具がありません。それから、おわかりいただけると思いますけれども、屈強そうな、人相の悪そうな人たちが多数乗っている、これは極めて海賊の可能性が高いと判断します。

具体的に海賊はどんな形でやっているのかを少しお話したいと思います。

まず、ソマリアは無政府状態で内乱が起きているため、武器等も非常に手に入りやすいです。したがって、機関銃やロケットランチャー等を持って重武装で海賊を行います。

そして、アフリカといってもハイテクでありまして、商船が本国やほかの商船などと話をしている無線を傍受したり、GPS等を使って目標の船舶がどこにいるのかを確認し、よし、その船舶をねらおうということになれば、仲間と携帯電話等で情報交換をします。そして、一たん襲撃を始めると10分ぐらいで乗っ取ってしまいます。

そして、これがアフリカの海賊の特徴ですけれども、身代金目的のために人質を確保します。東南アジアであれば、物品を盗んだり、高そうな物を持っていったりするだけのようですけれども、アフリカは身代金を目的としています。

これがこれまでの傾向でしたけれども、ただ、最近は手口が変わってきています。具体的に何をするかというと、拘束した大きな商船を海賊の母船にします。先ほど見ていただいた小さな船外機のついただけの船では遠くにはいきませんし、荒れた海には出ていきませんので、大きな商船に乗せて、外洋まで出て行って海賊行為を行うと。したがって、先ほど少しお話をしましたが、モンスーンといって海が荒れる時期であっても数は減らないということになってきます。

また、身代金目的で人質に危害を加えないという傾向がありましたけれども、最近はどうもリンチを加えるなど、変わってきている様子があります。報道にも少し出ていましたが、売り飛ばして臓器売買に使うかという話を現地で海賊同士がしていたということもあるようです。

では、具体的にどうやって襲撃するのか。中型から大型の船を母船として、海賊行為を行おうという海域に出ていきます。そして、ここには「ばら積み船」と書いていますが、ターゲットにする船を見つけたところで、SKIFFと言われる先ほど見ていただいた小型の高速ボートをおろします。そして、両側から挟むような形で詰めていって逃げられないようにした上で、船橋、操舵などを行っている上部構造物に銃撃等で威嚇して、はしごをかけて乗り込んでいくというのが襲撃方法のオーソドックスなものであります。

次に、具体的にどの辺で海賊事案は起きているのだろうという話を申し上げたいと思います。

次は海上自衛隊がソマリア沖・アデン湾で任務を開始した2009年の海賊事案発生のデータです。ソマリア沖・アデン湾にたくさん集まっていますが、それよりも多数がソマリアの東岸に出てきています。なぜかという話ですけれども、アデン湾で非常に取り締まりがされるようになってきたので、取り締まりをやっていないソマリア沖に出ていく、また、拘束した商船を使って遠洋に出ていく技術を学んだことで遠洋に出ていっているものであります。

次は、2010年のものです。今度はソマリア沖から若干北に上がって、アラビア海あたりに増え始めています。なぜかと申しますと、中東から来る航路帯とヨーロッパから来る航路帯が交わる場所で海賊をやれば、手っ取り早くターゲットを見つけることができる、効率的にやりましょうというものです。したがって、ソマリア沖からアラビア海に推移しつつあるという年であります。

その次は本年のデータです。先ほど申し上げたアラビア海に完全にシフトしています。また、紅海南部、ここは海峡で少し細くなっていて非常に船舶が密集するところですので、ねらいやすい、したがって効率よくといいますか、目標を探して攻撃ができるところを海賊も探していっている、学習効果が出ているというものであります。

日本船舶の被害状況はどうかということになるかと思えます。2009年から今までの日本に関係する船舶の大きな被害の状況を示した表ですが、乗っ取りを受けたものは2隻ございます。あとは乗っ取りまでには至らなかったものであります。

ちなみに、井上課長からもありましたけれども、海上自衛隊が護衛している船舶の中には、不幸にもこれらの船舶はおりませんでした。海上自衛隊が護衛していれば、そういうことはなかったと信じておりますが、船の航路や日程の都合等で入っていないで攻撃を受けてしまったというものであります。

国際社会においても、ソマリア沖の海賊問題は非常に注目を浴びておりまして、各国、機関等の対策を表にまとめていますが、ソマリア沖海賊に対して、これをやめさせるためにどのような手段をとってもいいという形で国連の安保理決議が四つ出されております。そして、EUについては、ソマリアの難民等に食糧を運ぶ世界食糧計画が契約した船が食糧を積んで走っていますけれども、その護衛をEU軍がやっています。また、米国が中心となって有志連合をつくっております、海賊対処活動を現地で行っております。また、中国、ロシアについては、自国に関係する船舶を個別に護衛している状況です。

このように、非常に広大な海域で海賊事案が起こっているということで、国際社会で連携をして対処していかないとカバーし切れないということがわかっていただけるかと思えます。

それでは、海賊対処行動は、どういう経緯で、そしてどんな法的な特徴があって行っているのかを簡単にお話したいと思います。

まず、ソマリア沖・アデン湾の海賊に対処するために、一昨年(2009年)の3月13日に海上における警備行動が発令され、翌日に海上自衛隊の水上部隊が現地に出発しております。そして、私どもが行きましたP-3C部隊は、それに遅れること2カ月、さらに効率的な対処をしようということで出発しております。

そして、より効率的に取り締まろうということで海賊対処法が成立し、施行となりました。海賊対処法では、一義的に海賊に対処するのは海上保安庁であります、ソマリア沖・アデン湾は重要な海域であるけれども、非常に遠いということ、また海賊が重火器、ロケットランチャーなどを持っているということ、また、他の国については海軍等が任務に当たっているところを勘案して、自衛隊が任務を継続することになりました。

では、先ほど申しました最初の根拠の海上警備行動と海賊対処法は何が違うのかを簡単にお話させていただきます。大きく影響が出てくるのは二つです。保護対象の範囲と武器使用の権限が変わってまいります。

もとの海上警備行動では、我が国の公共の秩序の維持ということで、日本に関係する船舶しか守れず、他国の船は残念ながら対象に入りませんでした、海賊対処法は国籍要件がなくなって、他国の船であっても守ることができます。

また、武器使用については、海上警備行動においては警察官職務執行法第7条で、少し難しいですが、自分もしくは他人の防護、または犯人の抵抗抑止のためのみに武器が使用できるということでしたけれども、海賊対処法になってくると、例えば海賊が目標になっ

ている船舶に近づいていっている、そして近づいていくのを止める手段がほかにない場合については武器を使用することができます。また、警察官職務執行法も引き続き準用できるといことで、権限が広がっています。したがって、より有効な護衛ができます。

海賊対処法を受けて自衛隊が対処するということが自衛隊行動命令が出まして、それを受けて部隊に付与された任務がスクリーンのとおりです。航行中の船舶の海賊行為からの防護の実施、そして警戒監視、情報収集、情報提供を行いなさいと決められております。

そのような形で現地に今行っている部隊の編成表です。海上自衛隊の自衛艦隊司令官のもとに水上部隊と航空部隊があります。水上部隊については護衛艦が2隻とそれに乗せているヘリコプターが3機、トータル400名であります。また、司法警察の権限を有する海上保安官も8名同乗しています。

航空部隊につきましてはP-3Cが2機、そしてそれを飛ばす、もしくは整備をするための海上自衛官と、航空機等を防護してもらう——私のときには山本1佐の部下をお借りしましたけれども、陸上自衛官が来ているということでもあります。当時は150名でしたが、今は新活動拠点、これは後で申し上げますけれども、場所が変わりまして広くなりましたので、人数が増えています。

任務を行っていますのは、ソマリア沖・アデン湾であります。非常に広いところなので船を護衛するのも非常に難しいというところで、国際推奨航路帯、英語でいいますとInternational Recommended Traffic Corridorの略でIRTCといいますが、これが設定されていまして、ここで水上部隊は船舶を護衛すると。そして、航空部隊についてはIRTC付近の情報収集をします。

先ほど、最初のところでは言いましたけれども、アデン湾は、福岡県から千葉県ぐらいまでがすっぽり入ってしまう広大なエリアです。そして、モンスーン期は海が荒れますが、モンスーン期でないときは海が穏やかなので、海賊行為が増えます。したがって、少しでも護衛する距離を伸ばそうということで、モンスーン期以外、海の静かなときにはさらに東側に200キロメートル航路を延伸して護衛しております。

航空隊だけだと片手落ちになりますので、水上部隊も少しご説明をさせていただきます。

どのように船の部隊が護衛するかというと、護衛するスケジュールは決まっています。護衛を希望する船舶は事前に国土交通省経由で申請が上がってまいります。そして、A点もしくはB点、さらに200キロメートル延伸した場合にはこのポイントに船が護衛開始前に集まってきます。それで、その船の隻数等を見て適切な船の陣形を決めて、護衛を開

始します。基本的には先頭及び後尾に護衛艦がついて護衛をしていきます。そして、船舶については、一番多いのが2列の縦隊をつかってIRTC（国際推奨航路帯）を航行するというものであります。そして時々ヘリコプターを飛ばして監視を行っています。

航空部隊については、IRTC（国際推奨航路帯）の付近を情報収集のため飛行し、付近を航行する船舶を1隻1隻目視して海賊船か海賊船ではないかを判断します。そして、海賊船らしいということであれば、周りにいる各国の軍艦、海上自衛隊の水上部隊、また、近くを1隻で走っている商船等がいれば、海賊がいるよという形で情報を伝達し、各船の安全を図っています。

各国がどんな形で、どんな役割分担でやっているかを簡単にお話しますと、航空部隊はIRTC付近の全般の水上目標を見て、脅威目標を発見、そして情報を伝達します。したがって、広域のところを警戒しているので、広域警戒監視方式という形で全体を見ています。

また、水上部隊については二つの方式があります。

一つ目、各国がやっているものは、先ほど申し上げました国際推奨航路帯をエリアに区分しまして、それぞれのエリアに各国が艦船をアサインして、役割分担をしているというものであります。

もう一つは、日本や中国、ロシア等がやっていますけれども、守るべき船のグループをつかって、それを護衛する形でずっとついていくやり方です。したがって、日本の艦艇方式では、守るべき船にずっとついていきますので、点で防御しているというものであります。また、水上部隊で各国がやっているエリア分担をしているところについては、いわば線で海域をおさえていると。そして、航空機については、もっと大きく面でとらえているんだと、そうご理解いただければわかりやすいのではないかと思います。

最後に、航空部隊の活動状況を見ていただきたいと思います。

具体的に、航空部隊はどこを基地にしているかといいますと、ジブチ共和国のジブチです。ジブチ共和国は、アラビア語、フランス語が公用語です。国民の90数%がイスラム教です。面積は2万3,000平方キロメートルで、宮崎県の3倍ぐらいになるのではないかと思います。人口は85万人で、宮崎県の75%ぐらいの数になろうかと思います。ジブチは非常に親日的な国であります。1977年に独立したときに、すぐに日本はジブチの独立を承認しました。1986年に隣のイエメンで内乱があつて、邦人が脱出しようとしたときにすぐに受け入れてくれたのはジブチということで、それから関係が続いていま

す。阪神・淡路大震災については、大統領が私金を義援金という形で出してくれましたし、今回の東日本大震災についても、すぐに支援をしますという話がありました。また、3月22日には、日本国民との連帯の日ということで、現地において慰霊というか、そういう形の式典もやってくれたと聞いております。非常に親日的な国であります。ちなみに、フランスの植民地だったところで、公用語はフランス語であります。

気候風土については、夏は連日40度超、暑いときは50度まで行きます。湿度が非常に高く、90%まで行くそうです。私はそういうときに当たりませんが、かなり不快だと聞いております。冬は日本の夏程度だのご想像いただければと思います。

治安は非常に良く、あっても、ひったくり程度です。

対日感情、日本人への感情は、先ほど申し上げた背景から非常にいいです。ただ、私が行ったときには、あまり日本人慣れをしていなくて、町で会ったらよく「ニーハオ」と言われました。「こんにちは」と返していると、そのうち夜であっても「こんにちは」と言われるようになりまして、日本語が大分普及してきました。

我々の部隊はアメリカ軍基地で生活をしまして、現地で任務に当たっております。この写真でおわかりのように、ジブチの国際空港の滑走路が東西に走っていますけれども、その南側の米軍基地の中に生活の場や司令部機能がありました。北側に航空機などを止めたり、整備したりする区画がありました。平成21年5月から本年5月の終わりまでがそういう状況でありました。

今年6月1日から我々が持っていた駐機場のさらに北側に新活動拠点ができて、そこに今はすべての施設が集約されているので、非常に効率的な部隊運用ができます。また、食事も日本食で生活のクオリティーが上がりました。

次が新活動拠点の開所式の様子です。今年の七夕の日に開催いたしました。ジブチの首相や各国の枢要な代表等に来ていただきました。

その次が新活動拠点の状況です。非常に近代的になっています。国内とあまり変わりません。

それでは、活動状況を若干見ていただきたいと思います。

水上部隊の活動の状況です。さっき申し上げたように、先頭に護衛艦が走って、2列縦隊で進んでいるということが黄色のマークでおわかりいただけだと思います。このような形で護衛をやって、また、洋上で各国と情報交換をしています。

次は航空部隊です。ジブチ空港から飛んでいきますけれども、事前に機内でブリーフィ

ングをして、また、水上部隊がいたら情報交換をし、1隻1隻、双眼鏡を使って目視で船舶を確認しているという状況です。

暑い中、地上で飛行機の離発着作業をしていて、写真では温度計を持っていますけれども、このときは48度でした。そんな中、長そでの服を着て、飛行機の誘導等をやっています。また、同じように飛行機を警備している陸上自衛官もいます。山本連隊長の厳しい教えのもとに、優秀な陸上自衛官が守ってくれているというものであります。

今、陸・海だけが強調されていますけれども、実は航空自衛隊もかかわってまして、向こうに派遣されている航空部隊に必要な物資を空自が運んでくれていました。海賊対処には、陸・海・空自衛隊がかかわっています。

現地に行きますと、各国と交流を持つ機会があります。次はそのときの写真であります。アメリカを中心とする有志連合の指揮官から表敬を受けたこともあります。写真の司令官はシンガポール人です。アメリカが中心となっていますが、司令官はシンガポール人が任命されていました。

私が行ったときにはお正月にかかりましたので、住んでいたアメリカ軍基地の指揮官に門松をプレゼントいたしました。また、ジブチの人にも我々の活動や日本を理解してもらうことが必要だと考えましたので、現地の子供との交流や、日本のODAで建った中学校などを訪問して、日本文化の紹介等も極力行いました。

海賊対処行動を終えての所見としましては、一番に考えつくのは海賊識別の困難性です。漁船に使う小型船舶が急に海賊船になるので、きのうは漁船、今日は海賊船みたいな感じですので、識別するのが難しいし、付近を通る商船も、小型の漁船が近づいてくるだけで海賊船に襲われているという緊急通報を鳴らすことがあります。それについて一つ一つ丁寧に対応していく必要があります。隊員にとっては非常にストレスがたまる仕事です。

1回1回が真剣勝負という仕事でありました。

2点目として、隊員のストレスをうまくコントロールしてやる必要があると感じました。気温50度という厳しい気候、先ほど申し上げたように、一つ一つが真剣勝負という任務、アフリカという異文化、また、家を離れて4カ月、同じ仲間だけとしか会わない、プライベートな空間もありませんでしたので、そういう中でストレスがたまらないように気をつけました。

3点目として、国際貢献の実感というところで、私どもは直接船を護衛することがありませんでしたけれども、水上部隊経由で、商船からのお礼などをいただくことはありまし

た。また、各国とミーティングがあるときなどに、各国の代表や軍関係者から非常に期待しているとか、よくやっているという話を聞きます。そういうところを受けて、国際社会や日本の国益に貢献できたことを非常に強く感じました。

4点目として、ジブチ共和国との良好な関係を促進していく必要があると感じました。航空機の運用は基地機能がないと続けることができません。その基地はジブチ共和国にあります。したがって、日本政府とジブチ政府はもちろん、現地の人たちと良好な関係を築くこと、日本をわかってもらって好きになってもらう必要があると感じております。海賊対処行動が終わって、現在はそのように感じています。

最後になりますが、海賊対処行動が始まって2年半を超えておりますけれども、残念ながら、最近、テレビなどに出てくる機会が減ったと感じております。それはそれでしょうがありませんが、隊員は厳しい気候の中、各国の軍人等と一緒に海賊対処任務に当たっております。今後も皆様からご支援、ご鞭撻をいただきたいと思っております。よろしくお願いたします。

どうもご清聴ありがとうございました。(拍手)

【司会】 どうもありがとうございました。

それでは、時間も残り少なくなってきましたが、質疑応答の時間に移らせていただきたいと思っております。

ご質問される方は、手を挙げてお知らせいただきたいと思っております。係の者がマイクをお持ちいたしますので、ご質問の際にはお名前と、どなたにご質問かを言っていただきたいと思っております。また、質問については今日の講演の内容に関するものとさせていただきますので、あらかじめご了承いただきたいと思っております。

それでは、質問のある方は挙手をお願いします。

それでは、一番前の方、お願いします。

【質問者：A】 今、全般的な話を聞いていますと、現在、PKOで日本から出ておられる方々が、交代を含めると数千人おられると。少なくともゴラン高原は10年という期限がありましたが、それがどんどん延びて、ハイチも地震が終わってすぐかと思ったら、まだずっと続いています。今度、スーダンとなると、ますますそうでしょう。当然、ソマリア沖も落ちつくところがないと思っておりますので、これもずっと続くだろうと。そうすると、

何百人もの隊員が常時いない状況が続いているわけですね。その中で今回、1,000人も減らそうという状況になっていることに対して国民は怒ってもいいのではないか、今の皆さんのしっかり頑張っておられる話を聞いて、そういう感じを受けました。

そこで、質問になるのかどうかはわかりませんが、運用のほうで防衛省から来られていますので、もうじき予算の問題が上がりますが、1,000名削減という話が出ていますけれども、そういうものにどう対処するのかをぜひお聞かせ願いたいと思います。

【井上課長】 ご質問、ありがとうございます。

ご質問の中にあつたように、自衛隊として国際協力を積極的に貢献していくということをこれまで話をしてきたわけですが、それを支えるのはまさに隊員であります。しかし、隊員の数は、これまでも大綱の中で逐一削減してきたのは事実でございます。

今回、東日本大震災で、そういう状況の中でも10万人態勢で当たるということで対応いたしました。国際協力、それから我が国の防衛——当然、警戒監視をやらないといけませんし、そういう中において10万人を災害派遣で対応させるということで、我々としても東日本大震災の教訓も含めて検討いたしました。何かがあつたときに支えるのは隊員一人一人の力なので、隊員のマンパワーをしっかりと確保する必要があると、これまでは削減ということでやってきましたけれども、防衛省としては、次の防衛予算では人員増ということで予算要求することにいたしました。今、財政状況が非常に厳しいということで、これからまさに予算折衝でいろいろ財政当局とやったりするわけですが、我々としては、隊員一人一人の力が非常に重要だと、その必要性を積極的に訴えたいと思います。また、こういう我々の動きを支えていただけるのは国民の皆さん一人一人の意見です。自衛隊は人員増が必要だということで、いろいろな機会に我々を支えていただければと思いますので、どうぞよろしく願いいたします。

【質問者：A】 どうぞ頑張ってください。

【司会】 ありがとうございます。

それでは、あともう一人ぐらいで終わりたいと思います。

それでは、ちょうど真ん中の方、お願いします。

【質問者：B】 海上自衛隊のP-3Cの飛行機の運用について、運用機は正味2機ということですが、スペア機は何機ぐらいでしょうか。

また、大きな整備があると思います。そういった定期点検をどういうふうに行っているのかをお伺いしたいと思います。

【浅岡1佐】 ありがとうございます。非常にお詳しい質問で恐縮しております。

スペア機は現地には持っていません。現地に持っていくのは2機だけでありまして、P-3Cはある時間単位で大きな整備を行う必要がありますので、それを超えないように飛行しています。したがって、残念ながら現地で大きな定期整備はできませんので、整備の時間に達しないような形でコントロールをしながら任務を行っております。

【司会】 ありがとうございます。

それでは、大変申しわけありませんが、時間がまいりましたので、この辺で本日のセミナーを終了させていただきたいと思います。ご来場の皆様におかれましては、長時間にわたりご清聴いただきまして、どうもありがとうございました。(拍手)

— 了 —